侘助椿

薄田泣菫

一

私は今夕暮近い一室のなかにひとり坐ってゐる。

灰色の薄くらがりは、黒猫のやうに忍び脚でこっそりと室(へや)の片隅から片隅へと這(は)ひ寄ってゐる。その陰影が壁に添うて揺曳くする床の間の柱に、煤(すす)ばんだ花籠がかかってゐて、厚ぼったい黒緑(くろみどり)の葉のなかから、杯形(さかづきがた)の白い小ぶりな花が二つ三つ、微かな溜息(ためいき)をついてゐる。

侘助(わびすけ)。侘助椿だ。—友人西川一草亭(いっさうてい)氏が、私が長い間身体の加減が悪く、この二、三年門外へは一歩も踏(ふ)

み出したことのない境涯を憐れんで、病間のなぐさめにもと、わざわざ届けてくれた花なのだ。

二

言ひ伝へによると、侘助椿は加藤肥後守（ひごのかみ）が朝鮮から持ち帰つて、大阪城内に移し植ゑたものださうだ。肥後守は侘助椿のほかにも、肩の羽の真つ白な鵲（かささぎ）や、虎の毛皮や、いろんな珍しい物をあちらから持ち帰つたやうに噂（うはさ）せられてゐる。現に京都清水（きよみづ）の成就院では、石榴（ざくろ）のそれのやうな紅い小さな花をもつた椿を「本

侘」と名づけて、肥後守が朝鮮から持ち帰つたのは、自分の境内にある老樹だと言つてゐる。実際世間といふものはいい加減なもので、肥後守が腕つ節の人一倍すぐれて強かつた人だけに、荷嵩（にかさ）になりさうな物だつたり、由緒がはつきり判（わか）りかねる品だつたら、その渡来の時日がぴつたり註文に合はうが、合ふまいが、そんなことには一向頓着なく、何もかもこの強者（つはもの）の肩に背負はすつもりで、

「はて、こいつも肥後守ぢや」

「ほい、お次もさうぢや」

といつたふうに、みんな清正の荒くれだつた手がかか

つてゐたことに決めてゐるらしい。

三

この椿が侘助といふ名で呼ばれるやうになつたのについては、一草亭氏の言ふところが最も当を得てゐる。それによると、利休と同じ時代に泉州堺に笠原七郎兵衛、法名吸松斎宗全といふ茶人があつて、後に還俗(げんぞく)侘助といつたが、この茶人がひどくこの花を愛玩したところから、いつとなく侘助といふ名で呼ばれるやうになつたといふのだ。

それはともかくも、侘助椿は実際その名のやうに侘びてゐる。同じ椿のなかでも、厚ぼつたい青葉を焼き焦がすやうに、火焔の花びらを高々と持ち上げないではゐられない獅子咲(ししざき)のそれに比べて、侘助はまた何といふつつましさだらう。黒緑の葉蔭から隠者のやうにその小ぶりな清浄身(しやうじやうしん)をちらと見せてゐるに過ぎない。そして冷酒のやうに冷えきつた春先の日の光に酔つて、小鳥のやうにかすかに唇を顫(ふる)はしてゐる。侘助のもつ小形の杯では、波々(なみなみ)と掬(く)んだところで、それに盛られる日の雫(しずく)はほんの僅かなものに過ぎなからうが、それでも侘助は心(しん)から酔ひ足(た)つてゐる。

四

「この花には捨てがたい侘があるから。」

かういつて、同じ季節の草木のなかから侘助椿を選んで、草庵の茶の花とした茶人の感覚は、確かに人並すぐれて細かなところがあつた。壁と障子とに仕切られた四畳半の小さな室は、茶人がその簡素な趣味生活の享楽を一盌（ひとわん）の茶とともに飽喫しようとするには、努めて壁と障子との一重（ひとえ）外に限りもなく拡がつてゐる大きな世間といふものを忘れて、すべて幻想と聯想（れんさう）とを、

しっかりとこの小天地の別箇の生活のうちに繋(つな)いでゐなければならぬ。

それには生活の方式がある。その方式といふのは、長い間かかつて磨かれた簡素な象徴的なもので、例へば、釜の蓋(ふた)の置き場所から、茶杓(ちやしやく)の柄の持ち方に到(いた)るまで、きちんと方式が定まつてゐて、それを定められた通りに再現することによつて、方式それみづからの持つ不思議な力は、壺(つぼ)のやうに小さな茶室に有り余るほどゆつたりとした余裕(ゆとり)と沈静(おちつき)とを与へ、そこにゐる主客いづれもの気持に律動と諧調とを生みつけ、また日ごとにめまぐるしくなりゆく現実の生活とは異(ちが)つた、

閑寂と侘とのひそやかな世界を皆のうちに創造しようとする。

そのひそやかな世界では、床の間に懸つた古い禅僧の法語の軸物、あられ釜、古渡り（こわた）の茶入（ちやいれ）、楽茶盌（らくぢやわん）、茶杓、――といつたやうな道具が、まるで魔法使の家の小さな動物たちが、主人の老女の持つ銀色の指揮杖の動くがままに跳ねたり躍つたりするやうに、それぞれの用に役立ちながら、みんな一緒になつて茶室になくてはならない、大切な雰囲気をそこに造り上げようとする。大切な雰囲気とはいふまでもなく、閑寂と侘とのそれである。

むかし、小堀孤蓬庵が愛玩したといふ古瀬戸（こせと）の茶入「伊予簾（いよすだれ）」を、その子の権十郎が見て、

「その形、たとへば編笠といふものに似て、物ふりてわびし。それ故に古歌をもつて、

あふことはまばらにあめる伊予簾

いよいよ我をわびさするかな

我おろかなるながめにも、これをおもふに忽然（こつぜん）としてわびしき姿あり。また寂莫たり」

といつたのも、その茶入が見るから閑寂な侘しい気持を、煙のやうに人の心に吹き込まないではおかなかつたのを嘆賞したものなのだ。

もしか茶室の雰囲気に少しでももの足りなく感じたら、そんな場合には何をおいても床の間の抛入（なげいれ）の侘助の花を見ることだ。自然がその内ぶところに秘めてゐる孤独感が、をりからの朝寒夜寒（あささむよさむ）に凝（こ）り固まつて咲いたらしい、この花の持味は、自然の使者として、その閑寂と侘心とを草庵にもたらすのに充分なものがあらう。

私は暗くなつた室でこんなことを思つてゐた。椿の花は小さく灰色にうるんで、闇の中に浮き残つてゐた。

底本：「泣菫随筆」冨山房百科文庫、冨山房
　　１９９３（平成５）年４月24日第1刷発行
底本の親本：「独楽園」創元社
　　１９３４（昭和９）年
入力：本山智子
校正：林　幸雄
２００１年７月６日公開
２００６年１月２日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。